

# 土佐日記の歌論

## — 人物描写という方法

北 島 紬

### 一、はじめに

土佐日記は、承平四年（九三四）に土佐守の任を終えた紀貫之が土佐から京に戻るまでの旅中を材料として日記風の記事に著した作品であるが、これまでの諸研究により、その内容には事実と異なる点が多く含まれることが分かっている。萩谷朴『土佐日記全注釈』<sup>①</sup>（以下『全注釈』とする）の解説によれば、その主題は「歌論展開」、「社会諷刺」、「自己反照」の三点にある。このうち、自己反照は前土佐守である船君の老いの嘆きと土佐で亡くした女兒への哀悼から成るが、特に亡女兒哀傷記事こそは土佐日記の最も重要な主題であるとされており、それぞれの軽重については次のようにも言われる。

〈先行研究1〉（『全注釈』二月九日条・本文評価）

土佐日記において、歌論的主題に基づく記事は、二月廿七日条に始まって、この二月九日の条に終わっているから、その範囲は、五日間中の四二日に過ぎず、同じく十二月廿七日に始まって、二月十六日の末尾に到る自照的主題の四九日間、十二月廿三日に始まって、二月十六日の半ばに到る諷刺的主題の五三日間に比べると、最もその期間は短いものであるといわねばならない。ただし、それに言及する頻度数から言えば、最多回数を示しているので、やはり、歌論的主題は、この作品にとつて、最も表層的には顕著なものであるが、作者自身の創作意識の深さからいえば、最も浅いものであるという結論に達せざるを得ない。

萩谷氏の言う通り土佐日記には、和歌を載せそれを論評する、いわゆる歌論的場面が多数含まれている。個々の和歌の表現や典故については既に多くの研究のあるところだが、歌論展開が作品の主題であるならば、そのような和歌批評は、場面を越え作品を通じて一貫した評価基準によってなされていると考えられる。しかし管見に入る限り、歌人貫之や古今集を切り離れた上で、土佐日記の歌論的場面について全体を論ずることは稀なようである。そこで本論では、土佐日記の和歌批評は具体的にどのような方法で行われ、またどのような一貫した評価基準を持っているかを考察する。

さらに萩谷氏は、それぞれの主題の出現期間と頻度から、土佐日記の歌論的主題は「創作意識の深さからいえば、最も浅いもの」とされている。だが、これは果たして妥当な理解であろうか。これについても後に検討を行う。

## 二、土佐日記作中における和歌批評

土佐日記の書き手や作中人物によって評価がなされている歌は日記中に一八首あるが、その中でも特に高評価の歌の特徴として、詠者の描写のために筆が割かれていることが挙げられる。

以下、本文の引用は新編全集による<sup>2)</sup>。批評部分には傍線、詠者に関する記述には点線を付した。

一二月二七日

……鹿兒の崎といふところに、守の兄弟、またこと人これかれ、酒なにと持て追ひ来て、磯に下りゐて別れがたきことをいふ。守の館の人々の中に、この来たる人々ぞ、心あるやうには、いはれほのめく。かく別れがたくいひて、かの人々の、くち綱も諸持ちにて、この海辺にてになひ出だせる歌、惜しと思ふ人やとまると葦鴨のうち群れてこそわれは来にけれ

一月七日

といひてありければ、いといたくめでて、行く人の……かかるあひだに、人の家の、池と名あるところより、鯉はなくて、鮎よりはじめて、川のも海のも、こと物ども、長櫃になひつづけておこせたり。若菜ぞ今日をば知らせたる。歌あり。その歌、

あさぢふの野辺にしあれば水もなき池に摘みつる若菜なりけり

いとをかしかし。この池といふは、ところの名なり。よき人

の、男につきて下りて、住みけるなり。……今日、破子持たせて来たる人、その名などぞや、今思ひ出でむ。この人、歌よまむと思ふ心ありてなりけり。とかくいひひて、「波の立つなること」とうるへいひて、よめる歌、

行く先に立つ白波の声よりもおくれて泣かむわれやまさらむ

とぞよめる。いと大声なるべし。持て来たる物よりは、歌はいかがあらむ。……ある人の子の童なる、ひそかにいふ。「まろ、この歌の返しせむ」といふ。……「まからず」とて立ちぬる人を待ちてよまむ」とて、求めけるを、夜更けぬとにやありけむ、やがていにけり。「そもそもいかがよんだる」と、いぶかしがりて問ふ。この童、さすがに恥ぢていはず。強ひて問へば、いへる歌、

行く人もとまるも袖の涙川汀のみこそ濡れまさりけりとなむよめる。かくはいふものか。うつくしければにやあらむ、いと思はずなり。

一月二〇日

二十日の夜の月出でにけり。山の端もなく、海の中よりぞ出で来る。かうやうなるを見てや、昔、阿倍仲麻呂といひける人は、唐土にわたりて、帰り来けるときに、船に乗るべき

ところにて、かの国人、馬のはなむけし、別れ惜しみて、かしこの漢詩作りなどしける。飽かずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。その月は、海よりぞ出でける。これを見てぞ仲麻呂のぬし、……よめりける歌、

青海原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かもとぞよめりける。かの国人、聞き知るまじく、思ほへたれども、……いと思ひのほかになむ賞でける。

例えば二月二七日「この来たる人々ぞ、心あるやうには、いはれほのめく」、一月七日「よき人」、女童の「うつくしければにやあらむ」、あるいは一月二〇日の阿倍仲麻呂など、作中で特に賞賛される和歌については、その詠者も人品優れた奥ゆかしい人物として描写されることが多く、優れた和歌は優れた人物によって詠まれるという意識が見られる。

逆に一月七日「破子持たせて来たる人」は、名を忘れたという一文によって「書くべきほどの人ではない」ことを描写している点が特異であるが、押し付けがましい詠みぶりや旅にふさわしからぬ不穏な歌の両方で道化的に「よき人」と「女童」に对照され、両者を引き立てている。これもやはり人格と和歌の出来を関連づけて描かれている例である。

また、一月十五日、二二日、二月六日など「似る」、「似つかはし」といった語が多用されており、詠作状況や詠者の状態・属性に「ふさわしい」ことが和歌を評価する大きな基準となっていることが知られる。

一月十五日

女の童のいへる、

立てば立つぬればまたゐる吹く風と波とは思ふどちにや  
あるらむ

いふかひなき者のいへるには、いと似つかはし。

一月二二日

年九つばかりなる男の童、年よりは幼くぞある。この童、船を漕ぐまにまに、山も行くと見ゆるを見て、あやしきこと、歌をぞよめる。その歌、

漕ぎてゆく船にて見ればあしひきの山さへ行くを松は知らずや

とぞいへる。幼き童の言にては、似つかはし。

二月六日

かの船酔ひの淡路の島の大御、みやこ近くなりぬといふを喜びて、船底より頭をもたげて、かくぞいへる。

いつしかといふせかりつる難波湯葦漕ぎ退けて御船来に  
けり

いと思ひのほかなる人のいへれば、人々あやしがる。これの中に、心地悩む船君、いたくめでて、「船酔ひし給べりし御顔には、似ずもあるかな」と、いひける。

二月六日「似ずもあるかな」は、詠者の「船酔ひ」という属性と和歌の出来とを引き比べて、意外な出来を珍しがる。優れた歌を詠むのは優れた人物であるという意識がなければ、このような書き方にはなるまい。

さらに、「似る」の語そのものが歌の評価として使われている場面もある。

二月九日

かくて、船引き上るに、渚の院といふところを見つつ行く。その院、昔を思ひやりて見れば、おもしろかりけるところなり。しりへなる岡には、松の木どもあり。中の庭には、梅の花咲けり。ここに、人々のいはく、「これ、昔、名高く聞こえたるところなり」……今、今日ある人、ところに似たる歌よめり。

千代経たる松にはあれどいにしへの声の寒さはかはらざりけり

なお、直接「似る」の語を使つてはいないが、風景や心情に「ふさわしい」、折に合った和歌を評価しようとする描写は次の三場面である。

一月九日

……宇多の松原を行き過ぐ。その松の敷いくそばく、幾千歳経たりと知らず。……おもしろしと見るに堪へずして、船人のよめる歌、

見わたせば松のうれごとにすむ鶴は千代のどちとぞ思ふべらなる

とや。この歌は、ところを見るに、えまさらず。

一月一日

……羽根といふところに来ぬ。わかき童、このところの名を聞きて、「羽根といふところは、鳥の羽のやうにやある」といふ。まだ幼き童の言なれば、人々笑ふときに、ありける女童なむ、この歌をよめる。

まことに名に聞くところ羽ならば飛ぶがごとくに都へ

もがな

とぞいへる。男も女も、いかでとく京へもがな、と思ふ心あれば、この歌よしとはあらねど、げに、と思ひて、人々忘れず。

一月二九日

正月なれば、京の子の日のこといひ出でて、「小松もがな」といへど、海中なればかたしかし。ある女の書きて出だせる歌、おぼつかない今日は子の日か海人ならば海松をだに引かましものを

とぞいへる。海にて、「子の日」の歌にては、いかがあらむ。

さて、先に高評価の和歌は詠者の説明に筆を割いていると述べたが、そもそも土佐日記の平均的な人物描写とはどの程度のものか。野村精一氏は次のような見解を示している。

〈先行研究2〉(野村精一「虚構、または方法について——散文空間論への途」)

人物造形の問題もまた小説——物語においては、格別の配慮が払われているはずである。だがここ土佐日記には、そのような意識はないに近い。個別的な、その日その日の出

来事の中では、楫とりや童らが、それぞれに生きていないではないが、それらを通じて一貫した人間像を対象化するのには、やや困難でありむしろその要はないかに見える。冒頭の「ある人」が後文の「さきの守」であり、後の「舟君」である必然性は造形の方法の側からすればどこにもない。「八木のやすのり」も「藤原のときざね」も、その限られた局面での固有名詞以上の働きはしていない。統一的な人間像の創出と、そうした個性の組み合わせによる人間関係の構築は、ここでは描かれる必要のない世界であったのである。<sup>3)</sup>

作品の目的が何であれ、土佐日記が「統一的な人間像」を描こうとしていないという指摘には異論がない。さらに付け加えるならば、日記中の人物はほとんどが醜化される。何か行動を起こす際にも船中一体となつて行つたかのような記述が目立ち、人物造形とは言いがたい。

そのような作品の中で、和歌の詠者に対しては特別に多くの描写・説明がなされるのは、それが歌論のために必要だったからであると考えられる。それを確認するため、次に和歌批評以外の場面での人物描写がどのようになっていのかを見てゆく。

### 三、人物描写

日記中に日付をまたいで特定の一人物と判別できるのは前土佐守である船君、亡女兒の父母、淡路専女または淡路の島の大御と呼ばれる老女、楫取といったごく僅かな人物にすぎない。<sup>5)</sup>

#### ① 船君

和歌の詠者として船君が表れるのは、一月二六日、二七日、一月一八日、二一日、二月一日、七日である。<sup>6)</sup>このうち和歌の評価がなされているのは一月一八日、二月一日、七日の三記事。以下に示す。

一月一八日

船も出ださで、いたづらなれば、ある人のよめる、

磯ふりの寄する磯には年月をいつともわかぬ雪のみぞ降る

この歌は、常にせぬ人の言なり。また、人のよめる、

風による波の磯には鶯も春もえ知らぬ花のみぞ咲く

この歌どもを、すこしよろし、と聞きて、船の長しける翁、月日ごろの苦しき心やりによめる、

立つ波を雪か花かと吹く風ぞ寄せつつ人をはかるべら  
なる

二月一日

また、船君のいはく、「この月までなりぬること」と嘆きて、  
苦しきに堪へずして、人もいふこととて、心やりにいへる、

引く船の綱手の長き春の日を四十日五十日までわれは経  
にけり

聞く人の思へるやう、「なぞ、ただ言なる」と、ひそかにいふ  
べし。「船君の、からくひねり出だして、よしと思へる言を。  
怨じもこそし給べ」とて、つつめきてやみぬ。

二月七日

……船君の病者、もとよりこちごちしき人にて、かうやうの  
こと、さらに知らざりけり。かかれども、淡路専女の歌にめ  
でて、みやこ誇りにもやあらむ、からくして、あやしき歌ひ  
ねり出だせり。その歌は、

来と来ては川上り路の水を浅み船もわが身もなづむ今日  
かな

これは病をすればよめるなるべし。一歌にことの飽かねば、  
いま一つ、

とくと思ふ船悩ますはわがために水の心の浅きなりけり

この歌は、みやこ近くなりぬる喜びに堪へずして、いへるな  
るべし。「淡路の御の歌に劣れり。ねたき。いはざらましもの  
を」と、悔しがるうちに、夜になりて寝にけり。

さらに一二月二三日には船君について「守からにやあらむ」  
とあり、前土佐守としての人品を称えられている。二月八日  
は「船君例の病起りて、いたくなやむ」とあって、持病のある  
ことが知られる。

以上の記述から、「船君」は次のような人物として造形されて  
いる。

- 1 和歌に一家言持つが、作歌技術には暗い。
- 2 土佐守としての任を廉直に果たし人に慕われた。
- 3 何らかの持病がある。

これらの描写はすべて和歌とともに表れている。1は言うま  
でもなく、一二月二三日条の土佐守の人品は一二月二七日条の  
和歌に、二月八日の病は二月七日の和歌にそれぞれ描かれる。

## ② 亡女児の親

父母を判別しがたいことも多いため、一括して掲げる。女児  
を亡くした親の言動が描かれるのは六記事。

二月二七日

かくあるうちに、京にて生まれたりし女子、国にてにはかに亡せにしかば、このころの出で立ちいそぎを見れど、何ごともいはず。京へ帰るに、女子のなきのみぞ悲しび恋ふる。ある人々もえ堪へず。このあひだに、ある人の書きて出だせる歌、みやこへと思ふをものかなしきはかへらぬ人のあればなりけり

また、ある時には、

あるものと忘れつつなほなき人をいづらととふぞかなしかりける

一月一日

……また、昔へ人を思ひ出でて、いづれの時にか忘るる。今日はまして、母の悲しがらるることは。下りし時の人の数足らねば、古歌に「数は足らでぞ帰るべらなる」といふことを思ひ出でて、人のよめる、

世の中に思ひやれども子を恋ふる思ひにまさる思ひなきかな

二月四日

この泊りの浜には、くさぐさのうるわしき貝、石などおほかり。かかれば、ただ、昔の人をのみ恋ひつつ、船なる人のよ

める、

寄する波うちも寄せなむわが恋ふる人忘れ貝おりて拾

はむ

といへれば、ある人の堪へずして、船の心やりによめる、

忘れ貝拾ひしもせじ白玉を恋ふるをだにもかたみと思

はむ

となむいへる。女子のためには、親、幼くなりぬべし。「玉ならずもありけるを」と人いはむや。されども「死じ子、顔よかりき」といふやうもあり。

二月五日

また、住吉のわたりを漕ぎゆく。……ここに、昔へ人の母、一日片時も忘れねばよめる、

住江に船さし寄せよ忘草しるしありやと摘みて行くべくとなむ。うつたへに忘れなむとはあらで、恋しき心地、しばしやすめて、またも恋ふる力にせむ、となるべし。

二月九日

かく、上る人々の中に、京より下りし時に、みな人、子どもなかりき、到れりし国にてぞ、子生める者ども、ありあへる。人みな、船のとまるところに、子を抱きつつ、降り乗りす。これを見て、昔の子の母、悲しきに堪へずして、



なかりしもありつつ帰る人の子をありしもなくて来るが  
悲しさ

といひてぞ泣きける。父もこれを聞きて、いかがあらむ。かうやうのことも、歌も、好むとてあるにもあらざるべし。唐土も、こども、思ふことに堪へぬ時のわざとか。

二月十六日

…思ひ出でぬことなく、思ひ恋しきがうちに、この家にて生まれし女子の、もろともに帰らねば、いかがは悲しき。船人も、みな子たかりてののしる。かかるうちに、なほ、悲しきに堪へずして、ひそかに心知れる人といへりける歌、

生まれしも帰らぬものをわが宿に小松のあるを見るが

悲しさ

とぞいへる。なほ、飽かずやあらむ、また、かくなむ。

見し人の松の千歳に見ましかば遠く悲しき別れせましや

二月九日の「唐土も、こども」は、前掲一月二〇日条の直後に「唐土とこの国とは、言異なるものなれど、月のかげは同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ」とあるのと同様の意になる歌論である。

総覧するに、亡女兒の父母は我が子の死を悲しむ以外の役割

を与えられておらず、かつその悲しみが表現される際には必ず和歌が用いられている。当該記述が『全注釈』の言うような亡女兒に対しての切実な情動に突き動かされて書かれたものであるとすれば、和歌のない記事に父母がまったく表れないのは非常に不自然である。例えば「京への思い」は切実な情動であり、一行に共有され、和歌のない記事の地の文にも繰り返し描かれている。一月一日、三日、二月二日等である。海賊への恐怖を述べる記事を含めればその数は更に増える。

亡女兒哀傷も、その初出である二二月二七日の段階では「ある人々もえ堪へず」とされ一行の共感を得ているが、二月四日「親幼くなりぬべし」からの記述では日記の書き手は冷静さを保ち、理解は示しつつも距離を置いている。この態度はその後も五日・九日と維持され、嘆きをくり返す父母の心情を分析してゆくが、その手段は彼らの詠む歌であり、亡女兒の父母の造形は、歌とその解釈がほとんど全てである。

土佐日記が作者の意図に沿って構成された作品ならば、和歌のない記事では、亡女兒への思いやその父母の行動を記述する必要はないと判断されたということになる。すなわち作中の亡女兒の父母は、哀傷歌が詠まれるために描かれた人物である。

### ③ 淡路専女（淡路の島の大御）

一月二十六日

このあひだに、風のよければ、……童も媼も、いつしかと思へばにやあらむ、いたく喜ぶ。この中に、淡路専女といふ人のよめる歌、

追風の吹きぬるときはゆく船の帆手うちてこそうれしかりけれ

二月六日

かの船酔ひの淡路の島の大御、みやこ近くなりぬといふを喜びて、船底より頭をもたげて、かくぞいへる。

いつしかといふせかりつる難波潟葦漕ぎそけて御船来にけり

いと思ひのほかなる人のいへれば、人々あやしがる。これがないかに、心地悩む船君、いたくめでで、「船酔ひし給べりし御顔には、似ずもあるかな」といひける。

二月七日にも名前のみ表れるが、行動の主体は船君であるため省略した。一刻も早い帰京を願っていること、船酔いに悩まされていることが分かる。ただし前者については船中の一行が当然共有する望みであるため、個性の表現としての人物造形と

は言いたいところがある。

後者はより重要な要素で、和歌の評価に関わる。二で土佐日記の優れた和歌は優れた人物とともに表れることを述べたが、「いと思ひのほかなる人のいへれば」や「船酔ひし給べりし御顔には、似ず」も、本来「船酔い」という属性を持つ淡路専女からは優れた歌は生まれるはずがないという意識を前提にしていることは、先に述べた通りである。しかし、二で見た一月七日「破子持たせて来たる人」が押し付けがましい態度と拙い歌を関連づけられていたのと異なり、淡路専女の場合には船中の一行が共有する喜びによって折にふさわしい歌を詠んだのであるから、稀な例外が生まれたとして愛でられたのである。短い記事ながら、歌の評価と詠者、詠作状況の関連の深さをよく示している。

### ④ 楫取

二で土佐日記の作中人物はほとんどが醜化されていると述べたが、楫取はその中であって例外的に描写の充実した人物である。ただし好意的なものではない。以下楫取が非難される主な場面を挙げ、直接的な表現を点線で示した。

二月二七日

榎させど底ひも知らぬわたつみの深き心を君に見るかな  
といふあひだに、榎取ものあはれも知らず、おのれし酒を  
くらひつれば、早く往なむとて、「潮満ちぬ。風も吹きぬべ  
し」とさわげば、船に乗りなむとす。

一月二一日

……黒鳥といふ鳥、岩の上に集まり居り。その岩のもとに、  
波白くうち寄す。榎取のいふやう、「黒鳥のもとに、白き波を  
寄す」とぞいふ。このことは、何とにはなけれども、ものい  
ふやうにぞ聞こえたる。人の程にあはねば、とがむるなり。

二月四日

榎取、「今日、風雲の気色はなほだ悪し」といひて、船出ださ  
ずなりぬ。しかれども、ひねもすに波風立たず。この榎取は、  
日もえはからぬかたゐなりけり。

一二月二七日条「ものあはれも知らず」に代表される性質  
こそ嫌悪の原因である。一月二一日「人の程にあはねば」も、  
「ものあはれ」を解さない人間が気の利いたようなことを言っ  
た、という意で、一貫した見解による記述になっている。

榎取のこのような造形（8）を読み解くにあたっては、一月九日条

が手掛かりとなる。榎取らが、船旅に心細い思いをする一行に  
構わず舟唄を歌う場面である。

春の野にてぞ音をば泣く、わが薄に手切る切る、摘んだ  
る菜を、親やまほるらむ、姑や食ふらむ、かへらや。

夜べの、うなるもがな、銭乞はむ、虚言をして、おぎの  
りわざをして、銭も持て来ず、おのれだに来ず。

これならず多かれども、書かず。これらを人の笑ふを聞きて、  
海は荒るれども、心はずこし風ぎぬ。

ここで逐一取り上げることがはしないが、「わかすすき」が「若  
薄」か「我が薄」か、「うなる」の性別の如何など、従来問題の  
多い箇所である。橋下智史氏は、これらの舟唄について丁寧  
な解釈を行った上で、次のように述べている。

〈先行研究3〉（橋本智史『王佐日記』「ふなうた」注釈『京

都大学國文學論叢』二九号・二〇一三年三月）

「春の野にてぞ」歌謡は、返しを待つものであり、「春の野  
で泣いている」と歌う側に対して「苦勞して摘んだ菜を親  
が食っているからか、姑が食べているからか」という滑稽

な返しをするものである。また、もう一首の「よんべのうなぬ」歌謡は、商人が子供に騙された歌と考える。……「春の野にてぞ」歌謡の「春の野」や「音を（ば）泣く」という言葉は、和歌の世界においては恋歌を思わせる。……貫之がこの歌謡を初めて聞いたとき、「春の野にてぞ 音をば泣く」から、何らかの恋歌的な展開を予想したことであろう。しかしその予想を裏切り、歌謡は滑稽な返しへと展開していった。「よんべのうなぬ」歌謡も同じく、「昨夜のあの子に会いたいなあ」と、この初句のみを聞けば、一夜の共寝をした相手にもう一度会いたいという気持ちを歌うものであるかのように思える。……しかし、この歌謡もそれを裏切り、「錢乞はむ」と滑稽な内容を展開していく。

一月九日に「これならず多」く歌われた舟唄の中からこの二つが選ばれ載せられたのは、貫之が「恋歌的な展開」が裏切られてゆく点に着目したからであるとする。

土佐日記は恋でないにせよ人情の働きを尊び、出立の見送りなどでは「心ざし」「思ひ」を称揚している。一方で、その表裏のようにしばしば諧謔の姿勢を見せることを思えば、この説には大いに説得力がある。ここに言う「恋歌的な展開」とは、美

的なもの、情あるものをよしとする価値観に従って動く世界であり、「鄙」に対する「都」の文化であつて、一二月二七日条「もののははれ」が求めるものともほぼ同義と考えてよからう。以下、これを仮に「和歌的世界」と呼ぶ。

楫取は、和歌の世界から一行を引き離す者として描かれる（点線部）。

一二月二七日（前掲「早く往なむとて、「潮満ちぬ。風も吹きぬべし」とさわけば」）

一月一七日

曇れる雲なくなりて、暁月夜、いともおもしろければ、船を出だして漕ぎゆく。このあひだに、雲の上も、海の底も、同じごとくになむありける。……また、ある人のよめる歌、

水底の月の上より漕ぐ船の棹にさはるは桂なるらし

これを聞きて、ある人のまたよめる、

かげ見れば波の底なるひさかたの空漕ぎわたるわれぞわびしき

かくいふ間に、夜やうやく明けゆくに、楫取ら、「黒き雲にはかに出で来ぬ。風吹きぬべし。御船返してむ」といひて船返る。このあひだに、雨降りぬ。いとわびし。

二月五日

……かくいひて、ながめつつ来るあひだに、ゆくりなく風吹きて、漕げども漕げども、後へ退きに退きて、ほとほとしくうちはめつべし。楫取りのいはく、「この住吉の明神は、例の神ぞかし。ほしき物ぞおはすらむ」とは、いまめくものか。さて、「幣を奉り給へ」といふ。いふに従ひて、幣奉る。かく奉れども、もはら風やまで、いや吹きに、いや立ちに、風波のあやふければ、楫取、またいはく、「幣には御心のいかねば御船も行かぬなり。なほ、うれしと思ひ給ふべき物奉り給へ」といふ。また、いふに従ひて、いかがはせむとて、「眼もこそ二つあれ。ただ一つある鏡を奉る」とて、海にうちはめつれば、口惜し。されば、うちつけに、海は鏡の面のごとなりぬれば、ある人のよめる歌、

ちはやぶる神の心を荒るる海に鏡を入れてかつ見つる  
かな

いたく、「住江」「忘草」「岸の姫松」などいふ神にはあらずかし。……楫取の心は、神の御心なりけり。

楫取は一二月二七日に心のこもった和歌のやり取りを妨害した後、一月一七日はまさに暁月夜、漢詩、和歌と揃い踏み

しみを破壊しているし、二月五日には楫取が住吉の神の意志の代弁者となることで、一行は住吉の神が風雅な歌に詠まれるべき神などでないことを知ってしまったと言う。なお、この条ではまた楫取が船子への命令を偶然にも歌めいた三十一文字で伝え、それを一行が「あやしく」と評する。これは一月二二日にあった「黒鳥に白き波」、「人のほどにあはねば」と同じく、楫取の人格と和歌・秀句が相容れないものであるという意識があるからこそそのエピソードである。

近藤さやか氏は、伊勢物語が土佐日記の場面構成に大きな影響を与えていることを踏まえ、伊勢を初めとした古歌のパロディ的な場面について「業平にしても仲麻呂にしても、伝説と化した昔、過去の人物だが、状況が異なるだけで、彼らのいた空間を幻視し、思いを共有することは十分可能な範囲にあると一行はとらえているのである。しかし、その思いは幻想に過ぎなかった」と説明するが、このような「ものあはれ」の世界は少なくとも作中においては決しておのずから綻びていくものではない。一行はそのような世界を求めて行動しては、一月七日の「破子持たせて来たる人」や楫取といった人物の妨害にあつて断念することを繰り返す。

楫取のこのような造形は、先に見てきた船君や淡路の専女な

どとは違い和歌の評価そのものには関わらない。代わりに、「ものあはれ」を解さないもの、和歌の世界にふさわしくないものとしての役割を背負い、その上で非難・軽蔑されている。土佐日記においては、和歌的世界は至上のものなのである。

『土左日記虚構論』は、和歌・日本・仮名文・受領・私的空間という象徴的な「女」（劣位項）が漢詩文・唐土・漢字・貴族階級・公的空間といった象徴的な「男」（優位項）を脱構築していると分析した上で、次のように言う。

〈先行研究4〉（東原伸明『土左日記虚構論 初期散文文学の

生成と国風文化』第9章2「階層に対するまな

ざし——差別の意識と関心と」・武蔵野書院・二

〇一五年）

歴史社会に実存した紀貫之は、貴族に奉仕する中流の階層、受領の階級に属しており、自己の属する社会の上と下の階級に目配りのできる位置・位相にいた。……だから、和歌はそうした下層の民衆の間からも胚胎して来るものとして、その実例を示そうというのが趣旨なのだろう。そして『土左日記』の場合は、そこに「鄙」という、地方性も加わってくるのだ。……『土左日記』の書き手は、下層の民、民

衆に対して差別的な感情を抱きつつも、和歌の下には平等だという主張をしているものと読めるのである。

この論の中で氏は、楫取のほか一月二日「幼き童」や二六日「女の童」などを社会の「最下層の民衆」であると位置付け、「和歌は貴族圏の人々の嗜みであり、下層の民などには和歌を解するような感性があるはずもないという常識」を土左日記が「覆す」としている。

しかし、本稿二において一月七日記事にも見たように、土佐日記は詠者の優劣と和歌の質との間に積極的な関連を見出している。「鄙」の男である「破子持たせて来たる人」の歌は、都から来て都へ帰っていく一行に黙殺され、都から男について下ってきた若菜の女性や、帰京の旅の一員である童の歌は、それと比して称えられる。漢詩文までも包摂した「ものあはれ」、和歌的世界の価値観は至上のものであるゆえに、「鄙」と「都」の間には価値の相克、脱構築は起こりえない。一月二二日に船の見送りに集った人々にせよ、一月二一日記事で舟唄を歌う童にせよ、都的な美意識に沿って行動する限りにおいて「あはれ」なのであり、そこから外れば住吉の神でさえ「すみのえ、忘れ草、岸の姫松などいふ神にはあらずかし」と失望とともに語

られるのであった。それは和歌の下での平等というよりはむしろ、和歌的世界の価値観に基づいて人格に序列をつけるものがある。

以上、土佐日記の人物描写を追い、直接的な和歌批評以外の場面での人物造形がどのようになっているのを見えてきた。その結果、いずれも和歌に関するものであった。

① 船君は和歌の批評者であり、その個性は和歌とともに表れる。

② 亡女児の父母は哀傷歌を詠む装置として設定されている。

③ 淡路の専女（淡路の島の大御）は、和歌とその詠者の属性とには本来深いかかわりのあることを強調する。

④ 樽取は和歌的世界と相容れないものの代表であり、それゆえに嫌悪・軽蔑される。

よって、二での仮説「和歌の詠者に対して特別に分量を割いた説明がされるのは、それが和歌批評のために必要だったからである」ということも確かめられる。土佐日記の人物は、和歌の提示・演出・修飾のために造形され、配置されている。

#### 四、おわりに

土佐日記の和歌批評は従来指摘されてきたような直接の論評や古歌の解説によっただけでなく、人物描写という方法によっても行われている。それは和歌の出来不出来と詠者の人格の優劣とを関連づけるとともに、詠作状況や詠者の属性に合った和歌を「似つかはし」として評価するものである。

よって土佐日記のいわゆる歌論的テーマは、期間的には日記の最終日である二月一六日までも含まれていると考えられ、さらに頻度としては日記中のほぼ全編に渡って出現する。

土佐日記の亡女児哀傷記事を自照的テーマと位置付け、歌論をそれに比して表層的なものとなす捉え方には大いに再考の余地がある。

#### 注

- (1) 萩谷朴『土佐日記全注釈』（角川書店・昭和四二年）
- (2) 菊池靖彦『新編日本古典文学全集 土佐日記 蜻蛉日記』（小学館・一九九五年）
- (3) 野村精一「虚構、または方法について——散文空間論への途」（『国文学 解釈と鑑賞』四四卷二号・昭和五四年二月）

(4) 二月二三日「上、中、下、酔ひ飽きて」、二月二七日「ある人々もえ堪へず」「ある人々、折節につけて」の類である。

(5) 例外として、二月二七日「藤原のときぎね、橋のすゑひら、こと人々、追ひきたり」、一月九日「藤原のときぎね、橋のすゑひら、長谷部のゆきまさらなむ、御館より出で給ひし日より、ここかしこに追ひくる。この人々ぞ心ざしある人なりける。この人々の深き心ざしは、この海にも劣らざるべし」がある。これは同九日の和歌「思ひやる心は海を渡れどもふみしなければ知らずやあるらむ」詠において、互いに真情のあることを強調するための伏線として描かれたものである。直接の和歌批評がされないため本文中には載せなかつたが、和歌のための人物描写の一種である。

(6) 徳原茂実「土左日記」船のをさしける翁」について——前国守（船君）像の確定へ——（『武庫川国文』第七八号・平成二六年三月）は、一月一八日歌及び二二日歌について次のように言う。

① 一月一八日歌は船君の作歌ではなく、「船の長しける翁」と呼ばれる神職の歌である。

・船君は和歌の不得意な人物（前掲二月一日、七日参照）

だが、「船の長しける翁」は一月一八日の二人の歌について「すこしよろし」と判断を下し、さらにその二首を止揚するかなような内容の歌を詠んでいて、和歌の道に通じている

・「船の長しける翁」は「船の長」という役目を「する」翁の意だが、「船君」は「船君なる人」などと呼ばれており、船君「である」人物

② 一月二二日歌は、土佐日記の書き手である女性が船君の心情を付度して詠んだ歌である。

・土佐日記において和歌や会話文はほぼすべて「詠めり」「いはく」「言ふ」等の語でその旨が記されているため、主語不明でそのような語もない当該歌は船君の台詞ではなく地の文として書かれたと見るべきである

しかしまず①については、船君は二月二七日と二月六日に他者の、二月七日には自身の和歌の評価を行っている。作歌と歌の評価はまったく別の技能であり、船君が作歌技術には習熟せずとも批評者として有能であつて不自然なことはない。かつ、ここで「船の長しける翁」が詠んだのは前の二首の論評にも近い歌である。自ら詠み出すことは不得手な船君が二首の尻馬に乗る形で詠んでみせたとすれば、「人物造形の破



綻」というにはあたらない。また「船君」が「船の雇い主であり、最も格上の船客」、「船の長しける翁」が「船客一行の長老格として統率する翁」と見れば、ほぼ同意義に「である」、「する」が問題なく並立する。他にその言動の一切描かれない神職を想定する必要はない。

②については徳原氏説に合理性がある。しかし日記の書き手たる女性はいざいざ船中の一行の心理を代弁する役割を負っており、こと唱歌詠についてはその詠作動機を詳細に語る場面も多い。これは作中の一人物による推測というよりは、日記の書き手として人物の正確な表現を行ったものと考えられる。よって人物造形という観点からは、当該歌の詠者がどちらであるにせよ、船君は旅路の苦しみと老いの嘆きを抱えていたものと見なせる。

(7) 一行全体の代表として行動が描写されたと思われる二月二日条「ある人、県の四年五年果てて、……住む館より出でて、船に乗るべきところへ渡る」、一月一四日条「船君、節忌す」などについては、人物造形の内に入れていない。

(8) 同種の造形が『古今和歌集』巻第九・羈旅歌・四一一の詞書または『伊勢物語』第九段の渡し守に見られると指摘がある。『北村季吟古註集成 土佐日記抄』（新典社・一九七八

年）。

(9) 近藤さやか『土佐日記』における「渚の院」幻想」（『物語研究』第一〇号・二〇一〇年三月）

〔付記〕 本稿は二〇一五年六月二〇日開催の中古文学会関西部会での発表に、質疑応答の席上等にて賜った御教示を踏まえ加筆訂正したものである。この場を借りて篤く御礼申し上げる。

（きたじま つむぎ／本学大学院生）